

国語問題

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子さつしを開かないこと。
- 二、問題は二十二ページに渡わたっており、 で構成されている。
ページの抜けや印刷不備があった場合には、直ちに試験監督かんとくの先生に申し出ること。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

一

次の①～⑩の——線部について、漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 荷物を柵なに収いめる。
- ② 作品の批評ひ評ひを読む。
- ③ 町を散策さんする。
- ④ 幼少こうの頃ころの思い出。
- ⑤ 川に沿たって歩く。
- ⑥ キリツ正ただしい生活を送る。
- ⑦ ショウジを張かり替かえる。
- ⑧ 会社にシウシヨクする。
- ⑨ たくさんのカンシユウを前まへに話す。
- ⑩ 力士りきがドヒヨウどひに立たつ。

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

水族館に行きたいといいだしたのは、まりもだった。

「イソギンチャクが見たいの」

たしかそういつていた。

イソギンチャク？

わたしも^{もみやま}朧山も、ピンとこなかった。イソギンチャク？ イルカとかペンギンとかではなくて？ なんだかまりもらしくなくない？ たとえばヒツキーがイソギンチャクを見たいというなら、なんとなくわかる気がするけれども。……なんてことをいうのは、なんだかヒツキーに失礼かもしれないし、イソギンチャクにも失礼かもしれない。

「いいけど」

戸惑いながらも、朧山はそう答えた。

わたしはといえば、まりもが水族館に誘っているのは、きっと朧山だけなんだろうと察して、うんざりしていた。^①夏ぐらいから、まりもはたまにそういう接し方をしてくるから。

「それってわたしも行っていいの？」

わたしが投げやりに確認すると、当然わたしも含まれていると思っていたらしい朧山は、おどろいた顔をして、

「もちろん」

と答え、まりもは微妙な顔で、

「いいけど」

って。

けど、なによ？

② わたしは聞き返さず、そのかわりにちよつと笑った。

どれだけまりがわたしにそつ(a)けなくとも、わたしは教室でまりもと朧山といることを選んでいる。なぜだろう。本当に、なぜ？

朧山やヒッキーといると、わたしはうれしかったり、心があたたかくなったりするけれど、まりもといるときは、もっと気持ちくせが複雑になる。それが、なんていうか、とても気持ちいい。癖くせになるっていうか。まりもに冷たくされると、まりものことがかわいいいような気がしてきて、まりものことをもつと甘あまやかしてみたくなる。

これってちよつと危険な感じ。間違ちがっているのはわかるのに、やめられない。

朧山もわたしと似ていて、まりもに対して、そういう複雑な感情を持つているような気がする。持て余しているっていうか……。

とても興味深い、わたしたちの、森まりも。

もうすぐ妹ができることを、わたしはまだまりもには話していない。

〈中略〉

日曜日。

事前学習によると、イソギンチャクは英語でシーアネモネ、海のアネモネだ。ちなみにドイツ語だと、海のバラ。日本語だと、磯いその中まんなか着(注1)か。それはそれで悪くないと思うけど、花の名前にしたほうがきれいだった気がする。ちなみに「磯いそ中まんなか着(注1)」って

春の季語らしい。すごい季節外れ。もう十一月だし。でもどうして春の季語なんだろう。

「えっ」

調べようとしてスマホを見たわたしは、絶句した。

いや、べつにイソギンチャクの季語の由来が衝撃的だったわけではなくて、衝撃的なメッセージが届いていたからだ。なんと、体調を崩した昀山は、本日のイソギンチャクツアーに不参加とな。出発してからいわれでも。

「寧音ちゃん、まりもとふたりで兵器？」

今度はふたり宛ではなく、わたしだけ宛にこっそりメッセージが届いた。それにしても、兵器って。「A」だよね。昀山がこんなまぬけな変換ミスをするということは、深刻な体調不良かもしれない。

「へーき！」

わたしは元氣よく返信した。

まりもは、オレンジ色のワンピースコートを着て、待ち合わせ場所に不機嫌な顔で立っていた。

「おそいよ」

「ごめん」

反射的に謝ってしまってから、念のため時計を確認したら、まだ待ち合わせ時間前だった。

「十一時っていつってたよね？ まだ十時五十八分だよ」

まりもはツンと斜め上を見て、聞かなかったふりをしている。

③「今日、本当に行く？」

乗り気じゃなさそうにまりもがいうから、さすがのわたしもイラっとした。

「まりもがイソギンチャクが見たいっていったから……」

「そうだけど」

「いいたいことはわかる。朧山ぬきで、まりもとわたしとふたりきりで、本当に行くのか？　っていうことをいいたいんでしょ。だってわたしは朧山のおまけなのだから。わたしは急にばかばかしくなってきた。」

「じゃあ、いい。帰る。ひとりで行けば？」

「わたしが怒ったのを見て、まりもはちよつと焦ったみたいだった。普段、わたしはまりもに怒ったりしないから。」

「ひとりで行くわけないでしょ」

「わたしを帰らせるわけにはいかないみたいで、まりもはわたしの腕をぐいぐいひっぱってくる。なんなんだ、一体。」

「前から疑問だったんだけど、まりもはどうしてそんなに自己中なの？」

「わたしの声に、まりもはハツとした顔で立ち止まる。かわいい顔が傷ついたように歪んだのを見て、わたしは残酷な気持ちになる。まりもはわたしから手を放して、その手で自分の髪の毛を触った。まりもの動揺したときの癖だ。」

「寧音ちゃん、そんなふうに思ってたの？」

「まりもがわたしの名前を呼ぶのは、とてもめずらしい。いつもはぜんぜん呼んでくれない。」

「みんなそう思ってるよ」

「わたしは笑顔で答える。性格が悪いのは、まりもではなくて、わたしのほうなのかもしれない。」

「でも、それでもわたしや朧山は、まりもと一緒にいるのが好きなんだから、冷たいこといわないでほしい」

「冷たいことって……？」

「本気でわからないという顔でまりもがいう。うそでしょ、とわたしは思う。」

⑤
「しかたない。」

「あのね、来た瞬間に『今日、本当に行く？』なんて不満そうにいわれたら、わたしとふたりきりでは行きたくないのかなって、思っちゃおうでしょう？」

わたしがいい聞かせるように伝えると、まりもは大きい目をさらに大きく見開いて、「ごめん」と謝った。

「あと、初山とわたしと三人でいるときに、初山とふたりきりの約束をするのもやめてほしい。不愉快^{ふげき}。無神経だよ」
まりもは泣いてしまった。

まりもをなだめすかしながら、わたしたちは電車に乗って最寄り^{もよ}の水族館までやってきた。このまま解散したら、初山が責任を感じるかも思ったので、水族館行きを中止するという選択^{たくし}肢は消すことにした。

ふてくされて口をきいてくれなくなったまりもは、入口付近で展示^⑥されていたペンギンを見て、ようやく機嫌を直したようだった。ペンギン様ありがとうと、わたしは心の中で手を合わせる。

目当てのイソギンチャクは、次の水槽^{すいそう}で見つかった。

^(注2)「触手^{しゅしゅ}って、なんだかセクシーじゃない？」

ガラスの向こうのイソギンチャクを見ながら、なぜか小声で、まりもがいった。まりものその声のほうがセクシーではないかしらと思いつつ、わたしは小声で返答する。

「そう？ どのへんが？」

「自分で考えてよ」

「ふーむ。でも、意外と人気あるんだね、イソギンチャクって」

イソギンチャクのいる水槽のまわりには、思いのほか人が集まっていた。

生き物にスマホをかざすと名前を教えるという便利なアプリがあつて、館内で無料体験中だったので試^{ため}してみたところ、そのイソギンチャクは「アジサイイソギンチャク」という名前だった。磯^{いそ}の巾着^{きんちやく}にも、さりげなく花の名前がついていたのだ。事前にネットの画像で見た印象より、かなり華^{はな}やかだった。

わたしがイソギンチャクを見直していると、横でまりもが「イソギンチャクが人気なわけじゃないと思う」と首を振^ふった。

「みんなクマノミを見に来ているんだよ。イソギンチャクといえば、クマノミでしょ」^(注3)

それは知っている。^(注4)クマノミのデイズニアニメも見たことあるし。

「共生関係っていうんだっけ。クマノミにはイソギンチャクの毒がきかないんだよね」

「どうしてきかないか、知ってる？」

わたしが知らないと答えると、まりも先生は得意げに教えてくれた。

「クマノミが体表から出す^(注5)粘液の化学組成が、イソギンチャクの粘液の化学組成に似ているんだって。それで、イソギンチャクはクマノミをエサと認識できないの。つまりイソギンチャクはクマノミに^(注6)騙されているってわけ」

「へえ。クマノミってかしこいんだね」

「違うでしょ。粘液の化学組成が似ていたのは、たまたま運がよかつただけじゃない」

「でも、クマノミはそれを利用したんでしょ？」

わたしが指摘^(注7)すると、まりもは黙^(注8)った。

まりもはしばらく静かに水槽を見ていたけれど、やがて小さな声でこういった。

「イソギンチャクは、クマノミなしでも、べつに生きていけるんだって」

「ふーん……」

その水槽の前からわたしたちがなかなか動かないものだから、後ろから来た大学生くらいのグループと、小さい子連れれた親子と思われる三人組が、わたしたちを避^(注9)けて先に進んで行った。まりもは水槽にそっと顔を近づけて、なにを考えているかわからない顔をしている。

「でもクマノミはさ、イソギンチャクがいないと、すぐに天敵に見つかって、食べられちゃうかもだよね」

まりもはかなり高い声をしている。かわいい声だけど、ねっとりとしたしゃべり方を、陰^(注10)で悪くいわれていることもある。さつきから「粘液の化学組成」という言葉が、わたしの頭の中にべったりとはりついている感じがする。

そんなことを考えて黙っているわたしの横で、まりもは「イソギンチャク論」を展開している。

「クマノミはイソギンチャクのおかげで安全だけど、水族館には天敵がないんだから、ちょっと事情が違うと思うんだよね。

B のおかげで、

C は人から注目されているでしょ？ だからここでは

D のほうが得をしているわけ」

「だけど、イソギンチャクは人間から注目されたいなんて、考えていないんじゃないかな」

「わたしね、朧山のことを好きなんだと思う」

えっ。わたしはちよつとびっくりして、まりもの横顔をまじまじと見た。

「え？ ……え？」

「だから、朧山のことを好きなんだってば」

「……わたしも朧山のこととは好きだよ」

^(注6)「そういうんじゃないくて」

しばらく無言で順路を進んだあと、巨大な水槽の中でふよふよとただよう、たくさんの白いくらげを見ながら、わたしたちは朧山について話を続けた。

「朧山はやさしいから、寧音ちゃんに声をかけたんだと思う。わたしの気持ちに気がついて、わたしとふたりきりでいたくなくなったから」

それって、やさしい……？

わたしこそ、利用された気がしてしまう。

〈中略〉

この半年とちよつとの間、わたしたち三人はいつもなんとなく「奇妙」で「不自然」だった。その原因をつかんだような気がした。

わたしはゆっくり息を吸って吐いてから、まりもにいった。

「わたし、グループぬけようかと思うんだけど」

グループっていう単語はなんかちよつと違う気がしたけど、ほかに表現しようもないので、とりあえず使ってみたら、やっぱりすごく違和感があった。

わたしの提案に、まりもが横で固まった気配を感じたけれど、まりもの顔は見なかった。返事はなかった。

「まりもは昶山とふたりでいたらいんじゃないかな。わたしは比企さん⑦ひきとふたり組になるよ」

「……なんでそんな意地悪いの？」

また泣かれると困るので、わたしは慎重に **E** を開始する。

「じゃあさ、比企さんがひとりでさみしそうなときは、入れてあげてもいい？ いつもじゃなくていいの。比企さんはひとりであるのも好きみたいだから」

まりもは少し嫌いやそうな顔をした。でも一瞬のうちに、嫌な顔をしてしまったことに自分で気がついて、さりげなく反省したみたいだったから、わたしは気づかなかったことにする。

まりもはわたしの足元を見つめながら答えた。

⑧ 「いいよ」

「それなら、三人でいる。これからも」

取引成立だ。

わたしたちは握手あぐをした。まりもの手は、なんだかひどく湿しめっていた。

(戸森ともりしるこ『ココロノナカノノ』)

(注1) 巾着…布や革かわなどで作り、口をヒモでくくれるようにした袋ふくろ。中に金銭などを入れ、財布として使う。

(注2) 触手…イソギンチャクなどの無脊椎動物せきついの口の付近にある、細長くて活発に運動する突起とこ。

- (注3) クマノミ：体長12～15cmの海水魚。体の表面に白くて幅の広い縦縞がある。
- (注4) クマノミのデイズニーアニメ：2003年に公開されたアニメ映画『フラインディング・ニモ』のこと。
- (注5) 粘液の化学組成：(動物の体から出る)ねばりけのある液体が、どのような物質からできているかを示すもの。
- (注6) そういいうんじゃなくて：そういう事ではなくて。

問一 — 線①「うんざりしていた」とありますが、「わたし」は何に対して「うんざり」しているのでしょうか。最も適当なものを

次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア まりもが朧山とだけ仲良くしようとしていること
- イ まりもが朧山と「わたし」を引き離そうとしていること
- ウ まりもの朧山や「わたし」に対する態度が悪すぎることに
- エ まりもと朧山が「わたし」を仲間はずれにしようとしていること

問二 — 線②「わたしは聞き返さず、そのかわりにちよつと笑った」とありますが、このときの「わたし」の気持ちとして最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

- ア まりもの発言に朧山が賛同していることに動揺し、話題を変えようとしている。
- イ まりもの発言にヒッキーに対する悪意を感じ、腹立ちを抑えられなくなっている。
- ウ まりもの発言にすつかり嫌気がさし、早く話を終わらせてしまおうと思っている。
- エ まりもの発言に含まれている意味が分からず、どういう態度を取るべきか戸惑っている。

問三
~~~~線 ㉑「そっけなくても」・㉒「さりげなく」・㉓「とりあえず」のことばの意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から  
選び、記号で答えなさい。

㉑「そっけなくても」

- ア 自信がなさそうでおどおどしたような様子であっても
- イ 相手の立場を考えて親切に接するような様子であっても
- ウ あからさまに否定的な態度を示すような様子であっても
- エ 愛想がなく思いやりも感じられないような様子であっても

㉒「さりげなく」

- ア 遠慮がなく
- イ かわいらしく
- ウ よそよそしく
- エ わざとらしくなく

㉓「とりあえず」

- ア ひとまず
- イ いきなり
- ウ 少し考えて
- エ 思いついて

問四  
A に当てはまることばを漢字二字で書きなさい。

問五  
——線 ㉔「今日、本当に行く？」とありますが、なぜ「まりも」はこのような発言をしたのでしょうか。最も適当なものを次の中から  
選び、記号で答えなさい。

ア 三人でそろって行かなければ行く意味がないと思ったから。

イ 初山が来ないと知って行く理由がなくなってしまったと感じたから。

ウ 「わたし」が本当に水族館に行くか、改めて意思を確認したかったから。

エ 初山の体調が悪いのでお見舞<sup>まゐ</sup>いに行った方がいいのではないかと思ったから。

問六 — 線④「まりもはわたしから手を放して、その手で自分の髪かみの毛さかを触さわった」とありますが、なぜ「まりも」はこのような行動をとったのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたし」に対する憎にくしみの感情が急にわき上がってきて、自分を抑おさえるのに必死だったから。  
 イ 「わたし」からの予想もなかった非難に対して、どう反応すればいいかわからなかったから。  
 ウ 「わたし」のことは心に痛めつけられて、もはや立ち直れないほどのショックを感じていたから。  
 エ 「わたし」から指摘ていさされた注意は全て当然のことだと思われて、態度を改めようと素直すに思えたから。

問七 — 線⑤「しかたない」とありますが、なぜ「わたし」は「しかたない」と思ったのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「まりも」が「わたし」にいらだっているから。  
 イ 「まりも」が「わたし」に冷たい態度を取るから。  
 ウ 「まりも」が「わたし」のことはの意味を理解しないから。  
 エ 「まりも」が「わたし」の態度に対して何も言わないから。

問八 — 線⑥「わたしは心の中で手を合わせる」とありますが、この行動には「わたし」のどのような気持ちきもちが表れているのでしょうか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

問九

B ・ C ・ D

には、X「イソギンチャク」・Y「クマノミ」のどちらが入りますか。それぞれ記号で答えなさい。ただし「まりも」は「イソギンチャク」と「クマノミ」の関係を、「朶山」と「自分」の関係に見立てて話をしていると考えられます。

問十 — 線⑦「比企さん」とありますが、「比企さん」は、本文中で別に何と呼ばれているでしょうか。本文中から抜き出して答えな  
なす。

問十一 — E に当てはまることばを本文中から漢字二字で抜き出して書きなさい。

問十二 — 線⑧「いいよ」とありますが、このときの「まりも」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 比企さんをグループに入れることについて、昶山が願っていることならばそうしたいと思い、快く承諾しようと思  
っている。

イ 比企さんをグループに入れることによって四人になることで、結果として昶山との時間が増えるため、快く承諾し  
ようと思っている。

ウ 比企さんをグループに入れることによって四人になることは気が進まないが、昶山を傷つけないために仕方なく承諾  
しようと思っている。

エ 比企さんをグループに入れるのは気が進まないが、そうしなければ「私」を追い出すようになってしまっているので、仕方  
なく承諾しようと思っている。

## 三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

本を読んでいると、「自分が何となく感じていたことが言葉にされている」と感じることもある。時代や土地を超えて、まったく知らない誰かが書いた文章に、自分が感じていることが書かれている。情けなかったり、後ろめたかったりする感情。自分ひとりが感じていたことが、他の誰かにも共通しているのだと知ると、深い共感が起こる。言葉によって、言葉にならない静かな感動を得ることは、読むこと、書くことの根源的なよるこびのひとつだ。

普段、友人や家族との会話ではなかなか話すことのない、自分の中の深い部分。悩み、モヤモヤしていること。人に打ち明ける打ち明けない以前に、そもそも自分で言葉にするのが難しいこと。うれしかったり、苦しいくらいに切なかったり、誰かの顔や後ろ姿をみていると胸の奥から湧きあがってくるもの。言葉にすると一気につまらないものになってしまいそうな思い出。軽く扱いたくないこと。大事なことは、大体は言葉にならないから大事なのだ。

書くことは、この「言葉にならないものを、それでも言葉にしたい」という営みでもある。それは別にかんたんなことではない。だけど、難しく考える必要もない。まずはやってみよう。魚の釣り方を知るには、とりあえずまず釣り糸を垂らしてみないと魚は集まってこないし、何も始まらない。言葉も、手を動かしてみないと集まってこない。魚釣りをうまくやる必要なんてないように、言葉を探す営みも、真剣に考える必要はない。ただ、楽しめばいい。

自分が感じていることを言葉にする。このプロセスは、そもそもかんたんではないと書いたけれど、苦もなくできる人はいらぬ。日頃から日記を書く習慣があったり、面と向かって直接話すよりも、あとから書いて伝える方が楽だという人は、自然とやっていることなのではないかと思う。

どうしていいかわからない人は、実際やってみようとするとうまくいってしまうかもしれない。例えば、日記を書いてみたり感想を求められたりしても、「今日誰々と遊んだ、楽しかった」。「何々という本を読んだ。感動した」……以上！ みたいな

③ 人。シンプル・イズ・ベスト。別にそれは悪くない。私は実は小中学生の頃はこのタイプだった。自分の感情に忠実なあまり、純度が一番高い（と小中学生心に思った）言葉を選ぶと、「楽しかった」「感動した」になるのだった。

それが悪いと言っているわけではない。どれもシンプルな表現で、さらに、自分が感じているものとのあいだにウソがない。けどあまりに大雑把ともいえる。

例えば、誰かが「（あなた）はどんな人ですか？」という問いを、別のクラスメートにたずねてみたと思像してみてほしい。クラスメートが、「日本人ですね」「十代ですね」と笑顔で答えていたとしたらどうだろう？ いや、もうちょいあるだろうとならないだろうか。<sup>（注2）</sup>カテゴライズがでかすぎるだろうと。そもそも「日本人」とかでくくるな、「十代」とか別に自分のアイデンティティじゃないし！ 私にもいろいろあるんじゃない！ などと言いたくなる。もうちょっと、私をちゃんと見てよと。

同じように、自分が経験した何か意味深い出来事や、本の感想を誰かに一通り話して、「そうですか、楽しかったんですね」「感動したんですね」「モヤモヤしたんですね」と言われると、まとめるな！ という気持ちになる。もつといろいろあつたの！ と。

複雑なものを大きな言葉でくくると、自分を構成するいろんなものが捨てられてしまう。無理に言語化したり、説明してしまう必要もないが、「言葉にできないくらい、本当はいろいろあるんだ」という気持ちは大事なものだ。

自分のペット（愛犬）を考えてみよう。よく知らない誰かにとつては「なんかの犬」としか表現されなくてもいいが、自分にとつては、子犬の時から一緒にいて、言うことを聞かなくて、家族が姿を見せると可愛いポーズを取って、寂しがり屋で、ご飯の時には必死な目で見上げてきて、ソファを破壊して怒られて、夜は共に眠ってくれて、おやつが好きで、最近少しおじいちゃん犬になってきて……と、取り替えのきかない一瞬一瞬をもった、唯一無二の存在だったりする。

そんなふうに、誰かの生きた姿は、本当はとても具体的なものだ。言葉や感情の機微を大事にするということは、誰かの姿や、自分が受けた印象、自分の感情について、自分だけはちゃんと見てあげることでもある。自分が見たものを記憶しておくこと、些細なちがいに気づいてあげること。<sup>④</sup>ちがいをどうでもいいとしないのは、人としてのやさしさに繋がっていく。そし

て、そんな人が多い世の中の方が、きっと生きやすい（気づかないでいてくれる「ありがたさ」もあるけれど）。

さて、では自分の考えや「心」をどうやって言葉にするのか。そもそも「心」とは……？ と哲学的な問いになりそうだが、あくまで「言葉の魚釣り」気分で、とりあえずやってみてほしい（魚釣りもまた深遠な営みだが、水に釣り糸と針を垂らしてみるのは、初心者だってできる）。

私のオススメは、とにかく最初はただ書いてみるというものだ。まず、自分が「見たもの」をただ書いてみる。どこどこに行った、誰と会ったという記録や事実を書くのではなく、そこはどんな様子だったか（混んでいた、空いていた、さびれたような感じがした……）。どんなにおいがあったか（草木の心地よいにおい、なんだかムツとするような、カビくさいにおい……）。そのとき自分はどんな感じがしたか（ほっとした、早く帰りたくなった……）。会った人はどんな表情をしていたか（疲れていた、何か言いたそうだった、ニコニコしていた……）。その人に会った自分はどうだった（いつもより多くしゃべった、なんか気まずかった……）などなど。

そんなふうに、自分が受け取ったものを、ただただ（できるだけ）詳細に、具体的に記述してみる。この時点で「純度」とか「精度」とか考えないでいい。使っていない水道を出せばしばらく錆びた水が出てきたりする。綺麗な水が出てくるまで、ただただ書いていく。

不思議なもので、自分をあえて表現しなくても、そうやってただ記述していると、自分特有の目線や感じ方があらわれてくる。そこに目が留まるんだ、そんなふうに解釈していたんだ、とか。同じ風景を見てスケッチを描いても人それぞれ違う絵になるように、同じものを見ても文章は変わっていく。

私は自分の日常や生活についてエッセイを書くことが多いが、読んだ方から、自分の「心」や感情について、丁寧に向き合っていますねと言ってもらうことがある。だけどそれは特別なことをしている感覚はなく、自分が出会ったものや体験、自分の反応、受け取った印象について、この「ただ記述する」をずっとやっているだけだったりする。「自分を表現しよう」なんて

思わない。受け取ったものをどれだけ言葉にできるか、書くときはそれだけを考えている。そして、次の項目で書くけれど、最初からすら言葉になることは、ほとんどない。

最初から自分の感じていることが明確に言語化できているから、文章にするわけではない。ただただ言葉を並べて書いているうちに、「そういうことだったのか」とわかっていく。例えば、こんなケースが自分にあつたと想像してみたい。

【友人Aちゃん。入学式で仲良くなつて以来、私とAちゃんはいつも二人でよく行動している。Aちゃんは大人しいけれど、やさしくて、よく笑う。一番仲が良いけれど、Aちゃんと一緒にいると、最近自分の中でどこか、モヤモヤすることがある。自分でもそれはどうということだかわからない】

あまりにもうつすらとした、漠然とした感覚。わざわざ別の友人に話してみたりするほどの大きな問題ではない。だけど、立ち止まって感じてみると、ここには自分の感じ方や思考が詰まっている。

こうしたよくわからない「モヤモヤ」を、ノートに向かって言葉にしてみると、こんな感じになる。

「Aちゃんといると、時々なんだか自分がちよつとモヤモヤしているときがある」

——「モヤモヤ」って、どんな感じ？

「なんというか、自分を変な感じ。Aちゃんに対して苛立つとか嫌な気持ちになるとかのネガティブな感じではない」

——じゃあ「変」って、どんな感じ？

「変っていつても、すごく変なわけじゃない——なんというか、自分が笑っていない感じ——笑うAちゃんを、自分は真顔で見るときがあるような気がする」

——ふーん。それはどんなときに起こる？

「誰かに向かつて笑っているAちゃんを見てみると、自分は  
 だけと仲良くしてほしいとか、思ったりするタイプじゃない」  
 ——なるほど。

「Aちゃんは何も悪くない。本当に良い子だし、私もAちゃんのが好き」

——本当に？

「それは本当。だけど、なんか **b** なることがある」

そんなふうには、自分と自分、「自分たち」でおしゃべりする。ん？ と思つたら「それはどゆこと？」と聞いてみる。違和感を感じたら、「本当に？」と聞いてみる。そうやって、どんどん言葉を出していく。

ここまで書いてみて、「さびしい」というワードが二回出てきた。

### 〈中略〉

さて、自分の中にあるまとまらないものを、ただ書き出してみようと前項で書いたけれど、こうも思うかもしれない。

「そもそも、自分が感じたことを書き出す語彙(注6)がない！」

自分の感じていることを言葉にするには、やっぱりある程度の語彙が必要だ。文章を書いていくためには、書くより読むほうが大事だったりする。本を読むと、「ああ、こんなふうには書けばいいのか」「こういう書き方ができるのか」とわかる。学ぶとは真似ること。読むことで、書くための言葉を獲得していくことができる。だから、もし書く手が止まるようだったら、先に人の文章を読んでみるのがオススメだ。

それでも書けないな、というときは、書かなくていいと思う。書くためには、ペンを置くことも大事だ。書けないとき

こそ、言葉を探し求めるのではなく、言葉が流れ込んでくる「器」<sup>⑨</sup>になつてみる。

高校生の頃、私は「言葉のスクラップブック」というものを始めた。読んだ本の一節、歌詞、先生や誰かが言ったこと、なんでもノートにメモしていった。自分のところに集まってきた、綺麗なものをちゃんと残したいというような自然な行為だったと思う。

集めた言葉はどれも、自分オリジナルのものではない。全部誰かの言葉だ。だけど不思議と、眺めていると、自分自身がそこに現れているような気がした。私が綺麗だと思つたもの、それらはすべて、私の心が反応したものとたちだった。

何になぜ反応したのか突き止める必要はない。わからないままでもいい。だけど、自分が反応したものとたちを眺めていると、自分から新たに言葉が引き出されていく。集めた言葉を眺めていると、どんな気持ちがあるか。その出会いによって自分はどうか変わったか。そんなふうに自分の中に言葉が溜まったら、あとはそれを、出すだけだ。

(安達茉莉子『14歳の世渡り術』)

(注1) プロセス：たどってきたみちすじ。過程。

(注2) カテゴリー：分類すること。決まった基準に従つて種類分けをすること。

(注3) アイデンティティ：自分が自分であると認められていると感じること。自己同一性。

(注4) 機微：表面からはとらえにくい微妙な事情。

(注5) どゆこと：「どういうこと」を、より実際の発音に近づけて表記した書き方。

(注6) 語彙：ある範囲の中で使われる言葉、単語の全て。

問一——線①「まずはやってみよう」とありますが、何を「やってみ」るのでしょうか。文中から七文字で抜き出して答えなさい。

問二——線②「苦もなくてできる人」とありますが、これは具体的にはどのような人のことをいつているのでしょうか。本文中のことはを利用して「人。」に続くように二十五字以内で答えなさい。

問三——線③「純度が一番高い（と小中学生心に思った）言葉」とありますが、これは別の言い方をするとどのような「言葉」であると言えるでしょうか。「な言葉」に続くように本文中から七文字で抜き出して答えなさい。

問四——線④「ちがいをどうでもいいとしないのは、人としてのやさしさに繋がっていく」とありますが、なぜそのように言えるのでしょうか。その理由を述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の相手となる人を他の人とは別格であると認めることは、その人に対して限りない愛情を注ぐのと結局は同じことだから。

イ 誰かと誰かの違いを明確に区別することは、一人ひとりの悩みをはっきりさせて解決すべき順番を決めることになるから。

ウ 誰か一人を他の人とは全然違う特別な人だと考えることは、その人だけを特に大切に扱い気に掛けることを意味するから。

エ 一人ひとりが他の人とは違うものをそれぞれに抱え込んでいるのだと気づくということは、その人の人格を尊重し思いやりを持って接するということにつながるから。


問五 — 線⑤「自分の考えや『心』をどうやって言葉にするのか」とありますが、作者は「自分の考え」をどのように言葉にしているのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が周りから受け取ったものを記憶にとどめ、文字として記録することによって言葉にする。
- イ 自分が見たものや感じたことをできるだけ詳しく、ひたすら書いてみることによって言葉にする。
- ウ 自分の考えや心とはもともとどういうものであるのかを、深く考え追求してみることによって言葉にする。
- エ 自分が日頃使っていることばというものの意味やはたらきについて、とことん知ることによって言葉にする。

問六 — 線⑥「この時点で『純度』とか『精度』とか考えないでいい」とありますが、では「この時点」で作者は何を考えていたのでしょうか。「ということ。」に続くように本文中から二十字以内で抜き出し、その最初と最後の三文字を答えなさい。

問七 — 線⑦「綺麗な水が出てくるまで」とありますが、これは具体的にはどのようなことを言っているのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 誰が書いても同じような内容しか出てこない段階から、自分だけの個性的な表現を見つけられる段階に進むこと。
- イ 自分の中にあつた良くない気持ちや間違つた考え方が徐々に整理されて、重要なことだけを書けるようになること。
- ウ 新しい考えや発想がなかなか思い浮かばない状態から、次々に新鮮なアイデアが湧いてくるような状態になること。
- エ ぼんやりしていた自分の考えがだんだんとはっきりしてきて、自分独自のものの見方や考え方が文章に表れてくること。

問八 本文中の  で囲まれた部分は、誰と誰との対話なのでしょう。解答欄に合うように五文字で本文中から抜き出して答えなさい。

問九 本文中の a ・ b に共通して当てはまる四文字のことはを答えなさい。

問十 — 線⑧「書くより読むほうが大事だったりする」とありますが、なぜそう言えるのでしょうか。その答えに当たる部分を「から」に続くように本文中から一文で抜き出し、その最初の三文字を答えなさい。

問十一 — 線⑨「言葉が流れ込んでくる『器』になってみる」とありますが、「器になる」とはどういうことでしょうか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の心が反応することはが現れるのを待って、そのことを自分の中に溜めていくこと。
- イ 書くだけでなく話したり聞いたりすることによって、そのことばに対する感覚を磨くこと。
- ウ 世の中にあふれている多くのことばを自分の中のため込み、独自の表現に変えてゆくこと。
- エ 自分の内部からことばがあふれ出してきた、止まらないような状況に身を置いてみることに。